

エンタメ

——— 仙頭 武則

■ 映画ドラマツルギー

最終回は「映画ドラマツルギー」を高速で説明しよう。

「ドラマツルギー」は「作劇法」だ。「作劇法」を解釈するには、人間の行動の原因ではなく、行動の文脈（流れ）の理解に努めることとされている。行動の文脈は行動分析学の基本精神の、以下の二点によって理解できる。その一、性格は行動の原因にはならない。その二、行動の原因はその行動を取り巻く状況にある。

「映画ドラマツルギー」はこれを礎に音楽や視覚を重視して、感覚的、絵画的に作品としての統一性や全体性を意識して、リズムを考えていく。つまり、行動の理由を劇中で説明する必要はないということだ。立場を変えて鑑賞時には、どうして、なんで、と問いながら見る必要はな

論理より出来事を重視

く、映像をひたすら凝視していれば、それで良いということなのだ。映っていないことに思考を働かせるのではなく、映っていることから想像を膨らませることが、豊かな鑑賞法ということになる。

映画の「エピソード」は「出来事」と翻訳するのが妥



生前の青山真治と筆者。青山の妻とよた真帆さんが「気に入った」と、祭壇に飾ってくれている＝2021年5月撮影

当だ。論理的な筋の展開を重んじる方法もあるが、何よりもまず「出来事」を想起して、それらのつながりと流れを組み合わせて構成することが映画の作劇方法なのだ。

あまりにも簡略化していて、理解に苦しみ向きも多々あると思われるが、お許し願いたい。

二年にわたるこの連載で、多くの方から感想を頂き、今後の励みとなった。妄言多謝。最後に、本稿で度々登場した盟友・青山真治。生前、共に愛知県内をくまなく行脚し、私にのこしていた物語の梗概（シノプシス）の冒頭を披露し、銘肝して締めくくりたい。この物語、必ずや映画として完成させようと思う。

「世の中は相変わらずひどい状態だが、それでも生きて行く」

（名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー）＝仙頭さんのコラムは今回で終了します。